

## 音楽科におけるカリキュラム・マネジメントに関する研究

—— 幼稚園、小・中学校、高等学校における理論と実践を中心に ——

藤田 文子\*

(2019年10月23日受理)

Study of Curriculum Management in Music Department : Focusing on Theory and Practice in Kindergarten,  
Elementary / Junior High School, and High School

Ayako FUJITA

キーワード: 音楽科、カリキュラム・マネジメント、幼稚園、小・中学校、高等学校

筆者はこれまで、平成 29 年に告示された「幼稚園教育要領、小・中学校学習指導要領等の改訂のポイント」や同じく平成 29 年に告示された幼稚園教育要領、小・中学校学習指導要領の音楽科を中心とする検討、平成 30 年に発表された「高等学校学習指導要領の改訂のポイント」や、平成 30 年に告示された高等学校学習指導要領の音楽科を中心とする比較検討を通して、カリキュラム・マネジメントの重要性を指摘してきた。本論文では、これら拙稿や、先行研究の再検討を軸に、更なるカリキュラム・マネジメント理解、最終的にはその理論と実践についての研究を筆頭一歩進め、深めることを目的とした。具体的には、まず、1.カリキュラム・マネジメントとは何か、2. カリキュラム・マネジメントの手順、3. 音楽科におけるカリキュラム・マネジメントという松永洋介の枠組みを一定程度援用し、4.音楽科におけるカリキュラム・マネジメントの理論と実践を幼稚園、小・中学校、高等学校において探った。その結果、発達段階を考慮すれば、ほぼ共通的に整合的なカリキュラム・マネジメントの作成可能なことがわかった。その後、まとめにかえてにおいて、こういった流れの中でのカリキュラム・マネジメントのあり方について、整合性のみでなく、発展的なカリキュラム作成や形骸的なカリキュラム作成への危惧など、今後の課題を含め、考察を加えた。

### はじめに

筆者はこれまで、平成 29 年に発表された「幼稚園教育要領、小・中学校学習指導要領等の改訂のポイント<sup>1)</sup>」や同じく平成 29 年に告示された幼稚園教育要領<sup>2)</sup>、小・中学校学習指導要領<sup>3),4)</sup>の音楽科を中心とする新旧学習指導要領に関する検討<sup>5)</sup>、平成 30 年に発表された「高等学校学習指導要領の改訂のポイ

---

\*茨城大学教育学部音楽教育教室

ント<sup>6)</sup>や、平成 30 年に告示された高等学校学習指導要領<sup>7)</sup>の音楽科を中心とする、幼稚園から、高等学校、ひいては大学への接続を含めた新旧学習指導要領に関する、比較検討において<sup>8)</sup>、カリキュラム・マネジメントの重要性を指摘してきた<sup>9)</sup>。

筆者はこういった研究を通して、浅学ではあるが、今回の新学習指導要領の眼目は、カリキュラム・マネジメントによって、教育現場において「主体的・対話的で深い学び<sup>10)</sup>」を成立させることではないかと考えるようになった。すなわち、今回の改定の要諦はカリキュラム・マネジメントであると。

すなわち教員の立場から今回の学習指導要領の改訂を考えるならば、その中心となるのがカリキュラム・マネジメントであって、主となる教育の目的を遂行するために、どういった手立てを計画するのか、すなわちどういったカリキュラムを、いかにして立てるのがか、どうしても取りまねばならない、意を尽くすべき、重要な課題ではないかと考えるようになったからである。

こういった流れを視野に入ると、本論文において、大括りではあるが、音楽科に関しては、単独で扱われがち(実際に音楽科に関連するカリキュラム・マネジメントに関する先行研究を見ると、幼稚園、小学校、中学校、高等学校といった校種別の扱いが主であり、選択された単独の校種で扱われているものが多い)カリキュラム・マネジメントに関して、拙稿<sup>11)</sup>や、先行研究の再検討を軸に、現時点における、幼稚園、小・中学校、高等学校におけるカリキュラム・マネジメントの理論と実践を、流れの中で検討することは意義あることであろう。

従って本論文では、拙稿<sup>11)</sup>や、先行研究の再検討を基盤に、更なるカリキュラム・マネジメント理解、最終的にはその理論と実践についての研究を竿頭一歩進め、深めることを目的とした。

具体的には、簡略にはあるが、1. カリキュラム・マネジメントとは何か、2. カリキュラム・マネジメントの手順、3. 音楽科におけるカリキュラム・マネジメントの、1 から 3 までで、幼稚園、小・中学校、高等学校で基本的に共通的に学ぶべき内容を、松永洋介の枠組み<sup>12)</sup>を一定程度援用する形で、総括的に把握する。その後、4. 音楽科におけるカリキュラム・マネジメントの理論と実践として 4-1. 幼稚園の表現(音楽)におけるカリキュラム・マネジメントの理論と実践、4-2. 小学校における音楽科のカリキュラム・マネジメントの理論と実践、4-3. 中学校における音楽科のカリキュラム・マネジメントの理論と実践、4-4. 高等学校における音楽科のカリキュラム・マネジメントの理論と実践の順で、それぞれの特徴の独自性を取り扱うこととする。これら一連の作業は、先行研究、新学習指導要領<sup>13)</sup>等を基盤に検討し、まとめにかえてで、流れに着目しながら今後の課題を含めて考察を加えることとしたい。

## 1. カリキュラム・マネジメントとは何か

ここでは、カリキュラム・マネジメントについて総括的な特徴を把握することとする。

田村知子は、カリキュラム・マネジメントを「カリキュラムを主たる手段として、学校の課題を解決し、教育目標を達成していく営み<sup>14)</sup>」としている。

松永洋介は、田村知子を参考文献として踏まえながら、カリキュラム・マネジメントについて述べている。

松永は「平成 29 年度学習指導要領では、コンテンツ・ベースからコンピテンシー・ベースへと学力観が転換した<sup>15)</sup>」とし、学力観が、内容を基盤にしたものから、資質・能力を基盤にしたものへと転換したこと

を指摘している。その理由として松永は、「こうした用語が登場してきた背景には、次世代を担う子どもたちにどのように生きる力を育てるかということがある<sup>16)</sup>」とし、さらに「……10～20年後には、日本の労働人口の約49%が、技術的には人工知能などで代替可能になると言われている。そうした中で、時代に対応したカリキュラム開発は学校にとって喫緊の課題となっている<sup>17)</sup>」と述べ、「プログラミング<sup>18)</sup>」が導入されるのも具体化の1つである<sup>19)</sup>としている。

また松永は、平成10年の総合的な学習の時間に伴う独自のカリキュラム開発が一般の学校において必要であったことを指摘している。また平成20年改訂に伴う「言語活動の充実」においては、思考力・判断力・表現力を培うために各教科でどのように展開するのかということが求められたとし、新学習指導要領では、「知識及び技能」「思考力、判断力、表現力等」「学びに向かう力、人間性等」という学力観に基づいたカリキュラム構成が求められるようになったとしている<sup>20)</sup>。

さらに松永は、カリキュラム・マネジメントについて小学校学習指導要領では、第1章「総則」の第1「小学校教育の基本と教育課程の展開」<sup>4</sup><sup>21)</sup>を引用し、「(前略)児童や学校、地域の実態を適切に把握し、教育の目的や目標の実現に必要な教育の内容等を教科等横断的な視点で組み立てていくこと①、教育課程の実施状況を評価してその改善を図っていくこと②、教育課程の実施に必要な人的又は物的な体制を確保するとともにその改善を図っていくこと③などを通して、教育課程に基づき組織的かつ計画的に各学校の教育活動の質の向上を図っていくこと(後略)」と示されているとしている<sup>22)</sup>(なお、ここでは()内の丸文字は松永によると付記されている)。

松永は、こういったカリキュラム・マネジメントのあり方を、中学校音楽科におけるカリキュラム・マネジメントとは何かとして、中学校学習指導要領の、児童が生徒に置き換えられている以外は同様である部分<sup>23)</sup>を引用し、小学校教育とほぼ同様に著述している<sup>24)</sup>。

筆者が確認したところ、カリキュラム・マネジメントについては、高等学校学習指導要領にも中学校学習指導要領と同じ記述がみられ<sup>25)</sup>、幼稚園教育要領についても、松永の言う①が「……『幼児期の終わりまでに育ってほしい姿』を踏まえ教育課程を編成すること」となっている以外は、同様の記述がみられる<sup>26)</sup>。なお、この点に関しては、幼稚園における教育の目標・目的と読み替えも可能であり、小学校以上の子どもたちの、カリキュラム・マネジメントに関連する教育の方向性として、ほぼ同じものと言えるであろう。

即ち、カリキュラム・マネジメントに関して言えば、学習指導要領において、幼稚園から高等学校まで発達段階を考慮しても、類似性が多くあり、整合性を重んじる形で著述されている。

以上、田村の記述、松永の学習指導要領を中心とした記述、また筆者が確認した記述などを背景に、カリキュラム・マネジメントとは何かについて述べた。

## 2. カリキュラム・マネジメントの手順

松永は、本論文 1. カリキュラム・マネジメントとは何かで示したように、小学校のカリキュラム・マネジメントの手順について、カリキュラム・マネジメントには①から③までの三つの側面がある<sup>27)</sup>として述べている。

以下、松永の説く2. カリキュラム・マネジメントの手順を簡略にまとめた。

まず、松永によれば、「そこでまず必要なことは、第一に児童、学校、地域の現状を把握すること<sup>28)</sup>」とあ

る。

松永は、まず、自分がいる学校の地域性、地域の人々の学校に対する願い、児童・生徒が学習面や生活面で可能なこと、抱えている課題を把握する必要性を説いている。

次に松永は、「第二に教育内容の質の向上に向けて、PDCAサイクル<sup>29)</sup>によって改善を図ること<sup>30)</sup>」としている。彼は、「……まず現行のカリキュラムを振り返り成果と課題を洗い出す(C)。次いで改善を図り(A)、指導計画や題材などを編成し直して(P)実行する(D)のである。これを1サイクルとして繰り返していくこと<sup>31)</sup>」を推奨している。「これらは具体的には学校の全体計画、各教科・領域の年間指導計画、時間割、題材指導計画、週案などの形で表れてくる<sup>32)</sup>」としている。

松永は「第三にカリキュラムの実施に必要な人や物を準備することである、これは人事や予算とも関わってくるので学校全体の問題として取り組む必要がある<sup>33)</sup>」としている。その際松永は、田村を引用し、「田村は『子どもにこのような力をつけるため、このような教育活動が必要だ。その教育活動のためにどのような条件整備が必要か』という観点が必要だと述べている。その際、学校だけでなく、地域(保護者、地域住民、地域企業など)の力も借りながら行うことでより地域との関係も深まっていくだろう」としている<sup>34)</sup>。

松永は、小学校のこういったカリキュラム・マネジメントの手順を、中学校におけるカリキュラム・マネジメントの手順として、児童や子どもという文言が生徒に置き換えられている以外は、ほぼ同様に著述している<sup>35)</sup>。

松永は、カリキュラム・マネジメントの手順を、小・中学校に限定して述べているが、1. カリキュラム・マネジメントとは何かですでに述べたように、筆者は、幼稚園から、小・中学校、高等学校までの、学習指導要領のカリキュラム・マネジメントの手順に関する記述<sup>36)</sup>には、類似性が多くあり、内容における整合性を確認している。発達段階による配慮を勘案しても、どの校種であっても概ねこういった手順でカリキュラム・マネジメントは可能になるであろうと筆者は考えている。

### 3. 音楽科におけるカリキュラム・マネジメント

松永は、小・中学校の音楽科におけるカリキュラム・マネジメントについて、「……音楽科だけで行えるものでなく、学校全体で行っていくものである。したがって音楽科はそれ自体独立して存在するものではなく、学校の教育目標を達成する上でどのように貢献できるのかという視点が必要になってくる<sup>37)</sup>」として、小・中学校に共通する形で、以下のように<sup>38)</sup>、音楽科のカリキュラム・マネジメントの理論・考え方の雛型とも言えるものを提案している。

以下に示すこととする。

- (1)学校の教育目標を確認する。
- (2)学校の教育目標の達成に際して、子どもに育てたい資質・能力を明らかにする。
- (3)学校の教育目標を実現するために音楽科としてできることは何かを、資質・能力と関連付けて考える。
- (4)音楽科学習指導要領を踏まえつつ、学年ごとの題材構成や年間計画を考える。
- (5)指導計画に沿って授業を行い、目指す目標に近づけたかどうかを検証する。

(6)授業終了後、成果と課題を明確にする。課題は次の授業や題材で行うことができるかどうかを検討し、実施する。

(7)年度末に一年間の成果を振り返り、次年度の指導計画に反映させる。

この理論・考え方は、高等学校学習指導要領<sup>39)</sup>の内容等に鑑みても、高等学校で対応が可能になるのではないかと筆者は捉えている。

また、幼稚園教育要領に関しては、松永の言うカリキュラム・マネジメントに関する文言の①松永の言う①<sup>40)</sup>に関して言えば、「……『幼児期の終わりまでに育ってほしい姿』を踏まえ教育課程を編成すること」となっている以外は、概ね同様の記述がみられる<sup>26)</sup>ことなどを考慮すれば、幼稚園で、小・中学校とほぼ同様の内容で対応できると筆者は考えている。

つまり、この理論・考え方は、発達段階を考慮すれば、幼稚園の表現(音楽)、小・中学校、高等学校における音楽科のカリキュラム・マネジメント作成に、共通的に対応可能であると言えるのではないかと筆者は考えている。

また、松永は次に、具体例として小・中学校両方の例を示している<sup>41)</sup>。

しかしながらここでは、ここにあげた考え方を、理論の一助と捉え、次の4で、この理論と共に実践として具体例を用い、その特徴と独自性を、要点を押さえる形ではあるが、示すこととする。

#### 4.音楽科におけるカリキュラム・マネジメントの理論と実践

ここでは、すでに述べたように、3.音楽科におけるカリキュラム・マネジメントで取り上げた松永の考え方を、理論の一助として取り扱い、基本的に松永の考え方を援用し、この理論と共に、実践として具体例もそれに対応したものとして以下に示すこととしよう。

##### 4-1. 幼稚園の表現(音楽)におけるカリキュラム・マネジメントの理論と実践

すでに述べたように、本論文では、幼稚園教育要領に関して、松永の言うカリキュラム・マネジメントに関する文言の①松永の言う①<sup>40)</sup>に関して言えば、「……『幼児期の終わりまでに育ってほしい姿』を踏まえ教育課程を編成すること」となっている以外は、小・中学校の学習指導要領と、概ね同様の記述がみられる<sup>26)</sup>ことなどを考慮し、小・中学校と幼稚園が、ほぼ同様の内容の理論・考え方で対応できると筆者は考えている。

つまり、この理論・考え方で対応するならば、発達段階を考慮すれば、幼稚園の表現(音楽)におけるカリキュラム・マネジメントの理論と実践においても、次に述べる小・中学校における音楽科のカリキュラム・マネジメントの理論と実践の場合と、ほぼ同様の考え方で作成可能であろう。しかし今回は、幼稚園に関しては詳述を省略する。

##### 4-2. 小学校における音楽科のカリキュラム・マネジメントの理論と実践

松永の具体例によると、本論文で取り上げた、松永の3.音楽科におけるカリキュラム・マネジメントの(1)から(7)までの項目分けに対応して、具体的な方策を提案している<sup>42)</sup>。

以下に松永の例の概略を示すこととする。

- (1)A 小学校の教育目標である、「一人で考え、人と考え、最後までやり抜く子ども」を取り上げる。
- (2)期待される資質・能力は、「知的好奇心に基づく主体性」「支え合う協調性」「自己実現に向かう創造性」である。
- (3)教育目標は子どもに分かりやすく示したもの。音楽の授業を通して、主体性・協調性・創造性を育てることとしている。
- (4)学年ごとの題材構成や年間計画を考える。
- (5)期待される資質・能力を検証しながら、育成することとする。
- (6)授業終了後、(1)で示した3つの資質・能力に基づく検証を行う。
- (7)各学校の年度末の教育指導の評価に関する会議で、音楽科としての取り組みを報告する。改善点については次年度の指導に生かす。

松永は、カリキュラムに関して、「絶えず検証され改善されるものでなくてはならない<sup>43)</sup>」としている。

#### 4-3. 中学校における音楽科のカリキュラム・マネジメントの理論と実践

松永の具体例によると、本論文で取り上げた、松永の3.音楽科におけるカリキュラム・マネジメントの(1)から(7)までの項目分けに対応して、具体的な方策を提案している<sup>44)</sup>。

以下に松永の例の概略を示すこととする。

- (1)A 中学校の教育目標である、「独歩、信愛、協働」を取り上げる。
- (2)期待される資質・能力は、「夢や願いの実現を目指してひたむきに全力を尽くす」「仲間への思いやり・心づかいを行動で示す」「仲間とともに高まろうとする」である。
- (3)教育目標は生徒に分かりやすく示したもの。音楽の授業を通して、「独歩、協働、信愛」を育てる。
- (4)学年ごとの題材構成や年間計画を考える。
- (5)期待される資質・能力を検証しながら、育成することとする。
- (6)授業終了後、(1)で示した3つの資質・能力に基づく検証を行う。
- (7)各学校の年度末の教育指導の評価に関する会議で、音楽科としての取り組みを報告する。改善点については次年度の指導に生かす。

松永は、カリキュラムに関して、小学校同様、「絶えず検証され改善されるものでなくてはならない<sup>45)</sup>」としている。

#### 4-4. 高等学校における音楽科のカリキュラム・マネジメントの理論と実践

すでに述べたように、本論文では、カリキュラム・マネジメントに関して、高等学校学習指導要領において、小・中学校と概ね同様の記述がみられる<sup>46)</sup>ことなどを考慮し、小・中学校と高等学校において、ほぼ

同様の内容で対応できると筆者は考えている。

つまり、この理論・考え方で対応するならば、発達段階を考慮すれば、幼稚園の表現(音楽)におけるカリキュラム・マネジメントの理論と実践においても、小・中学校における音楽科のカリキュラム・マネジメントの理論と実践同様の考え方で、さらには高等学校における音楽科のカリキュラム・マネジメントの理論と実践においても作成可能であろう。しかし今回は、高等学校に関しては詳述を省略する。

### まとめにかえて

以上、1. カリキュラム・マネジメントとは何か、2. カリキュラム・マネジメントの手順、3. 音楽科におけるカリキュラム・マネジメント、4. 音楽科におけるカリキュラム・マネジメントの理論と実践について検討した。

今回の松永の説を援用すれば、発達段階における差異はあるものの、内容的に整合性のある姿が見られ、ほぼ同様なアプローチで幼稚園の表現(音楽)から、小・中学校、高等学校の音楽科までのカリキュラム・マネジメントの作成が可能であることが分かる。

これまでも、カリキュラム作成に関しては、学びが成立する仕掛けを作るといった考え方はあり、それは今回の学習指導要領の改訂のみに限られたことではないといった見方もあろう。

しかしながら、1. カリキュラム・マネジメントとは何かで、松永の文章を引用したように<sup>17),18)</sup>、時代の変化に対応して、カリキュラム作成も大きく変化する必要性が生じてきている。

そういった意味で、今まで難しいとされてきたシュタイナー教育<sup>47)</sup>などを、小・中学校になどにおいて部分的に取り入れるなどの方向も考えられるであろう。

シュタイナーのエポック方式に関して言えば、「シュタイナー学校では、毎朝、子どもが受ける最初の授業として一種のテーマ学習をするのである。テーマの内容は低学年では生活領域により、高学年ではさらに教科領域によって区切られる。子どもたちは一つのテーマについての体験が深まるように配慮された総合学習を続けるのであるが、その期間は普通 4 週間である。たとえば『植物』のエポックでは、子どもたちはお話を聴き、絵をかき、野外観察をし、また絵をかきなど、時間をかけてゆっくりと植物の特徴に関心が深まるように導かれていく<sup>48)</sup>」とされており、比較的短い単位で展開することが多い、我が国の授業と比較し、大宇宙、小宇宙の形でも認識可能な、調和のとれた教育方法としても、吟味されてしかるべきであろう。

シュタイナーの、こういった「植物」のエポックなどに着目した、エポック方式の考え方を取り入れた、エポック授業は、カリキュラム・マネジメントにおいて、音楽科を取り入れた次のような展開も可能であろう。

児童・生徒が主体的・対話的に、「植物」に関連した歌を歌う、「植物」を表現するために作曲をする、「植物」を表現するために楽器を演奏する、「植物」に結びついた踊りの表現に対応した音楽を作曲し、取り入れるなど、音楽科が関与することで、より教科等横断的に、より総合的に、また広くなど、現在までの授業と比較すると、より違った形で、深い学びが成立すると筆者は考えている。

こういった、今まで実現が難しいとされてきた教育方法に関しては、今回のカリキュラム・マネジメントでこそ再認識されねばならないであろう。

そもそもシュタイナー学校では、「……まとまりのある全体的な発展が何よりも重要視され、そのためにエポック方式を選ぶのである<sup>49)</sup>」とある。

筆者は、今回取り上げたカリキュラム・マネジメントが形骸化され、内容的に広まりや深まり、統一性を

欠くことを最も恐れる者である。

今後は、現在までの音楽科における教科教育研究のあり方と、乖離しない形でのカリキュラム・マネジメント研究などを通して、さらに新しい形での研究が求められていくのではないかと筆者は考えている。

なお、本論文では主に松永の著作を先行研究として扱ったが、他のカリキュラム・マネジメントに関する先行研究も参照されたい<sup>50)</sup>。

## 注

- 1) [http://www.mext.go.jp/a\\_menu/shotou/new-cs/\\_icsFiles/afldfile/2017/06/16/1384662\\_2.pdf](http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/new-cs/_icsFiles/afldfile/2017/06/16/1384662_2.pdf) (2018, 9.15 閲覧).
- 2) [http://www.mext.go.jp/a\\_menu/shotou/new-cs1384661.htm1384661\\_3\\_2pp.17,18.](http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/new-cs1384661.htm1384661_3_2pp.17,18.) (2017,8,14 閲覧).なお本論文では『幼稚園教育要領平成 29 年告示 文部科学省』(教育情報出版[保育出版社],2017)を使用した。なお本論文では、この文献を便宜的に、幼稚園教育要領と表記することとする。
- 3) [http://www.mext.go.jp/a\\_menu/shotou/new-cs1384661.htm1384661\\_4\\_2](http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/new-cs1384661.htm1384661_4_2) (2017,8,14 閲覧).なお本論文では『小学校学習指導要領(平成 29 年告示)平成 29 年 3 月告示 文部科学省』(東洋館出版社,2018)を使用した。なお本論文では、この文献を便宜的に、小学校学習指導要領と表記することとする。
- 4) [http://www.mext.go.jp/a\\_menu/shotou/new-cs1384661.htm1384661\\_5](http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/new-cs1384661.htm1384661_5) (2017,8,14 閲覧).なお本論文では『中学校学習指導要領(平成 29 年告示)平成 29 年 3 月告示 文部科学省』(東山書房,2018)を使用した。なお本論文では、この文献を便宜的に、中学校学習指導要領と表記することとする。
- 5) 山口(藤田)文子「新旧幼稚園教育要領,小・中学校学習指導要領の音楽科に関する内容と教育方法の特色と課題」『茨城大学教育学部紀要(教育科学)』,67 号,(2018),pp.189-196.
- 6) [http://www.mext.go.jp/a\\_menu/shotou/new-cs/\\_icsFiles/afldfile/2018/04/18/1384662\\_3.pdf](http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/new-cs/_icsFiles/afldfile/2018/04/18/1384662_3.pdf) (2018, 9.15 閲覧).
- 7) [http://www.mext.go.jp/component/a\\_menu/education/micro\\_detail/\\_icsFiles/afldfile/2018/07/11/1384661\\_6\\_1\\_2.pdf](http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/micro_detail/_icsFiles/afldfile/2018/07/11/1384661_6_1_2.pdf) (2018,8.10 閲覧).なお本論文では『高等学校学習指導要領(平成 29 年告示)平成 29 年 3 月告示 文部科学省』(東山書房,2019)を使用した。なお本論文では、この文献を便宜的に、高等学校学習指導要領と表記することとする。
- 8) 山口(藤田)文子「新旧高等学校学習指導要領の音楽科に関する内容と、教育方法の特色と課題」『茨城大学教育実践研究』,37 号,(2018),pp.67-75.
- 9) 本論文注5)の前掲論文、p.190、p.195。また、本論文注8)の前掲論文、p.70。
- 10) 本論文注1)「幼稚園教育要領、小・中学校学習指導要領等の改訂のポイント」2. 知識の理解の質を高め資質・能力を育む「主体的・対話的で深い学び」、本論文注6)「高等学校学習指導要領の改訂のポイント」2. 知識の理解の質を高め資質・能力を育む「主体的・対話的で深い学び」参照。
- 11) 本論文注5)、8)参照。
- 12) 松永洋介「1 | カリキュラム・マネジメントの概説・構想例」初等科音楽教育研究会編『小学校教員養成課程用 最新初等科音楽教育法 2017年告示「小学校学習指導要領」準拠』(音楽之友社,2018)、pp.116,117、松永洋介「3 | カリキュラム・マネジメントの概説・構想例」中等科音楽教育研究会編『中



- 校・高等学校教員養成課程用 最新中等科音楽教育法 2017/18年告示「中学校・高等学校学習指導要領」準拠』（音楽之友社,2019）、pp.114,115. 参照。
- 13)幼稚園、小・中学校については、平成29年告示のもの。また、高等学校に関しては、平成30年告示のものをさす。それぞれ、本論文注2)～4)、7)参照。
- 14)田村知子『カリキュラムマネジメント—学力向上へのアクションプラン—』日本標準ブックレット No.13(株式会社 日本標準, 2014), p.12.
- 15)～22)本論文注12)前半の前掲書、p.116.参照。
- 18)堀田達也「プログラム教育の必修化と学校の対応課題」[編集]奈須正裕「[新教育課程]ポイント理解 ②よくわかる 小学校 中学校新学習指導要領全文と要点解説」(〔株〕教育開発研究所, 2017),pp.24,25.参照。
- 21)本論文注3)前掲書、p.18.参照。
- 23)本論文注4)前掲書、p.20.参照。
- 24)本論文注12)後半の前掲書、p.114.参照。
- 25)本論文注7)前掲書、p.20.参照。
- 26)本論文注2)前掲書、p.5.参照。
- 27)～32)本論文注12)前半部分の前掲書 p.116.参照。
- 29)大貫守「1 解説①カリキュラム・マネジメントとは何か」田中耕治・岸田蘭子監修 京都市立高倉小学校・京都大学大学院教育学研究科共育方法研究室 著『資質・能力を育てるカリキュラム・マネジメント 読解力を基盤とする教科の学習とパフォーマンス評価の実践』(株式会社 日本標準,2017),p.105 参照。ここでは、「……カリキュラム・マネジメントが、たんなる計画(Plan)で終わらないために、実際に年間指導計画に沿って実施し(Do),活動を評価し(Check),計画やチームのあり方自体を練り直す(Act)サイクル(PDCA)サイクルを意識することも重要である」とある。
- 33)本論文注12)前半部分の前掲書 pp.116,117.参照。
- 34)本論文注12)前半部分の前掲書 p.117.参照。
- 35)本論文注12)後半部分の前掲書 pp.114,115.参照。
- 36)本論文注7)前掲書、p.20、本論文注23)、本論文注21)、本論文注26)参照。
- 37)本論文注12)前半部分の前掲書、p.117、及び後半部分の前掲書、p.115.参照。
- 38)同上。
- 39)本論文注25)参照。
- 40)本論文注12)前半部分の前掲書、p.116、及び後半部分の前掲書、p.114.参照。
- 41)本論文注12)前半部分の前掲書、p.117、及び後半部分の前掲書、p.115.参照。
- 42)本論文注12)前半部分の前掲書、p.117.参照。
- 43)同上。
- 44)本論文注12)後半部分の前掲書、p.115.参照。
- 45) 同上。
- 46)本論文注25)参照。
- 47)実松宣夫「第11章 シュタイナーの教育思想—無視されてきた思想と教育—」山崎英則/徳本達夫編 著『教育専門シリーズ③ 西洋教育史』(株式会社ミネルヴァ書房, 2001)pp.123-134.

48)同上書 pp.129,130.

49)同上書 p.130.

50)特に[編著者]津金美智子『平成 29 年度版 新幼稚園教育要領ポイント総整理 幼稚園』(株式会社東洋館出版社,2017)CHAPTER1幼稚園教育要領改訂のポイント,p.17,CHAPTER2教育課程の編成と幼稚園教育におけるカリキュラム・マネジメント,pp.55-106,[編著]山下薫子『平成 29 年度版 小学校新学習指導要領ポイント総整理 音楽』(株式会社東洋館出版社,2017)CHAPTER1音楽科改訂のポイント, p.17,CHAPTER3[授業改善の視点②]カリキュラム・マネジメント,pp.83-107,「月刊高校教育」編集部編『高等学校新学習指導要領 全文と解説』(学事出版株式会社,2018),pp.14,15,pp.21,22,pp.28-30.などを参照されたい。